

### 米村みゆき

化粧品等のCMで喧伝されている「アンチエイジング」。耳当たりはいいが、その言葉に根ざすのは「若い」を忌み嫌うものの方であることに気付かされた。

私が職場で向き合っている二十歳前後の学生たちは、高齢者を見て、自分たちがいつか迎える姿だという想像力を大切にしている。当然だろう、なぜなら「若い」は思ひ狭うイメージを多く持つからだ。私たちの多くが「若い」を受け入れたくないと思ってしまうのは、それは若いときと抱えた否定的なイメージゆえだろう。そのイメージ形成に深く関わってきたものが小説や映像作品等であることは否めないし、だからこそ、その表象を探ることに意味がある。

宮崎監督の映画『ハウルの動く城』（2004年）は、18歳のヒロインが魔法の

## 文化



## 文学が描く高齢社会



佐江梁 著『黄落』  
 としなほ姿のうちには、ハウルの心臓 heart を読む  
 こころに響かぬ風情が描き出されている。  
 「今だてて恋をしていよう」と  
 叫ぶ90歳の「おはあちゃん」に響かされてしまうストーリーである。高齢者に変化したヒロインは、家を飛び出しハウルの城の住民たちと共に

# 「エイジング」の問題あらわに

同生活を送る。最新作の『崖の上のポニョ』（2008年）もまた、宮崎監督の映画は高齢者が登場する作品が多い。

『ハウルの動く城』にはもう一人、高齢の女性「荒地の魔女」が登場する。イギリスの児童文学の原作とは設定が異なり劇画化されている。外見から判断すればかなりの高年齢らしく、ヒロインに比べて

「あーん」と赤ちゃんなことばで接することがある。ヒロインからフーンで食事を頂く「荒地の魔女」が、若い頃の傲慢な女性像ではなく可愛らしい「おはあちゃん」になることは目をひ

く、なぜなら、社会学者の上野千鶴子さんが指摘するように、女性の場合は「かわいなおはあちゃん」になることは生存戦略であり、それで世話をしてもかえらるなら、高齢者は介護者に対して喜んで赤ん坊のように振る舞うかもしれないからだ。実際、佐江梁の『黄落』（2005年）に登場する主人公の母が首をすくめて笑う仕草は、世話を担う主人公の妻を喜ばせるためであることが示唆され

ていいる。介護や「若い」の問題を世間に投げかけ、認知させたのは、有吉佐和子の『恍惚の人』（1997年）である。「初老」にさしかかる夫婦が認知症を患う八十代の夫の父親を

介護する話だ。妻は、現在でいう。キャリア・ウーマンの設定であるから「母が男の介護を担う役割について批判的な視点を持ってても不自然ではなかった。しかし、妻は「主婦」という規範に縛られ一人で介護を続ける。夫は、父の機嫌を自分の将来像と受け止め、エイジングへの恐怖を倍増させる。「現実」をより効果的に演出する、さまざまな小説装置が施された『恍惚の人』は、高齢者福祉制度の見直しに契機にもなった。

よねわら・みゆき 専修大学文学部准教授。名古屋大学大学院文学研究科博士課程修了。文学博士。専門は日本近現代文学、アニメーション文化論。著書に『宮沢賢治を創った男たち』（青弓社）、共編著に『介護小説』の風景 高齢社会と文学』（森活社）など。

介護や「若い」を描いた小説や映画等は、普段見えにくく潜在化している問題を顕在化させる可能性を秘めている。これらを観み、分析するのは、行政や経済の側面から変更に難しい、私たちが生きる高齢社会についての固定化された「現実の枠組み」や「解釈」を微力なりとも変えてゆきたいと願うからである。



介護や「若い」の問題を世間に投げかけ認知させた、有吉佐和子の『恍惚の人』